

《観光・交流》

いしのまき し      しまぼうけんがっこう  
宮城県石巻市 「あじ島冒険楽校」



# 宮城県石巻市「あじ島冒険楽校」

子ども達との交流と高齢者の生きがいづくり、そして、島民主体の地域づくりへ  
島外の子供達との交流が高齢者に生きがいを与え、  
また、小さな成功体験を積み重ねることで、島民主体の  
地域づくりに発展

あじ網地島は、島民が約 490 名。高齢化率が 69%を超える。子どもがほとんど住んでいないこの島で、夏の一時、子どもの声が賑やかに響き渡り、そのはしゃぐ声に目を細める島民達の姿がある。廃校された網長中学校を改築した「島の楽校」がその活動の舞台だ。子ども達が体験する活動は盛り沢山で、海に、工作に、学習に、様々な企画で子ども達の心はくすぐられる。子ども達は、また来たいという思いと感謝の気持ちを思い思いの絵や文章で文集や色紙などにまとめる。島民は、子ども達の笑顔から元気をもらう。この事業を実現しているのは、島民によるボランティア活動だ。この活動が、島を構成している2つの集落が取り組む共同作業となった。



出典)石巻市資料

この活動を実現するまでには、島民による地域づくりの体験の積み重ねと多くのNPOの支援があった。その背景に見える宮城県職員の姿。この小さな島が、多くの子ども達が待ちこがれる冒険楽校をどうやって企画・運営しているのか？そして、この経験が島の次の動きへとどのように展開していったのか？

## 取り組み概要

### 取り組みの目的

島外の子供達との交流機会となる「あじ島冒険楽校」を実施し、高齢化の進む島で高齢者のやりがいを創出し、未来ある子ども達の健全育成に資する島となることとあわせて、市町村合併の中で、離島である網地島の存在を広く発信する。

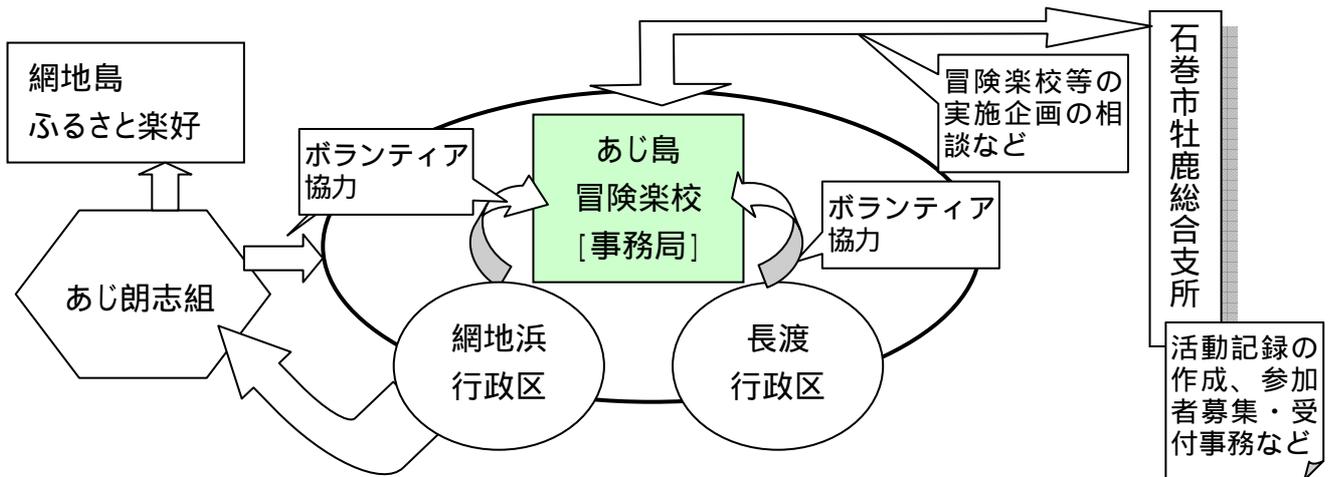
### 取り組みの内容

- ・ あじ島冒険楽校（網地島の獅子踊り、シーカヤック・海水浴、竹鉄砲・竹とんぼづくり、流木アート、ながぐづ先生（高橋和吉先生・約40年前に網長中学校で教鞭を執った）の植物教室、「あなご抜き」（島独特の魚釣り方法）、食事づくり、肝だめしなど）
- ・ 網地島ふるさと楽好（虐待等で苦しんだ児童養護施設の子供達を島へ招待する活動）
- ・ 島の環境改善活動（島外のボランティアと交流しながらの道づくりや植林など）

### 取り組み主体

- ・ あじ島冒険楽校
- ・ 石巻市網地浜行政区、長渡行政区
- ・ あじ朗志組
- ・ 石巻市牡鹿総合支所

## 取り組みの体制



## 取り組みのポイント

### 1. 小さな成功体験の積み重ねが島民主体の地域づくりを育む

石巻市との合併話が持ち上がり、離島への支援が弱まるのではないかと不安がある中で、県職員からの働きかけがあり、自分達の手で地域活性化に取り組むことが必要と認識し、小さな成功体験を積み重ねることで、島民主体の地域づくりとして実現した。

### 2. 島の誇りを島外の目から発見

人口流出等により島の生活文化や自然は何の価値もないと誇りを失っていたが、島外のNPOとの交流を通じて、その価値に気付くことができ、活動を進める自信となった。

### 3. 島全体の活動としての位置付け

島の自治組織の活動の一つとして承認するプロセスを経たことで、その後の活動に広がりを持たせ、この活動を通して、地域の発展を考える動きが出てきた。

### 取り組みによる成果

- ・ 高齢の島民が活動を楽しむとともに、子ども達に教えることでのやりがいを創出
- ・ 地域問題を解決するボランティア組織の結成（あじ朗志組）
- ・ 「網地島ふるさと楽好」など、新しい社会貢献の活動への展開

### 今後の展望

- ・ 四季を通して、「あじ島冒険楽校」を開校できる体制づくり
- ・ 島全体の産業の活性化への取り組み
- ・ 網地島の高齢者とともに地域づくりへ積極的に取り組む移住者を増やしていくこと
- ・ 高齢者が安心して幸せに暮らせる地域づくり

# 石巻市の概況

## 人口は微減、高齢化が著しい

石巻市は北上川の河口に位置し、宮城県北東部地域を代表する都市である。

石巻市の住民基本台帳ベースでの人口は、163,216人(2010年9月末現在)である。全国等との比較のために2005年の国勢調査をみると、人口総数167,324人であり、1980年を100とした場合の推移では、全国、宮城県がほぼ横ばいであるのに対し、石巻市は1割減となっている。また、高齢化率は、全国平均よりわずかに高い宮城県平均をさらに4ポイント上回っている。産業構造では、全国、宮城県よりも第1次産業、第2次産業の比率が高いという特徴がある。

## 半島有り、川有り、島有りの風光明媚な都市

太平洋に面した石巻市は、海洋性の気候で、内陸地方と比較すると寒暖の差が少なく、東北地方の中では年間を通して比較的温暖な地域である。牡鹿半島を有し、沖合には金華山や今回の舞台である網地島のほか多くの小さな島々が浮かび、風光明媚な景観を有している。

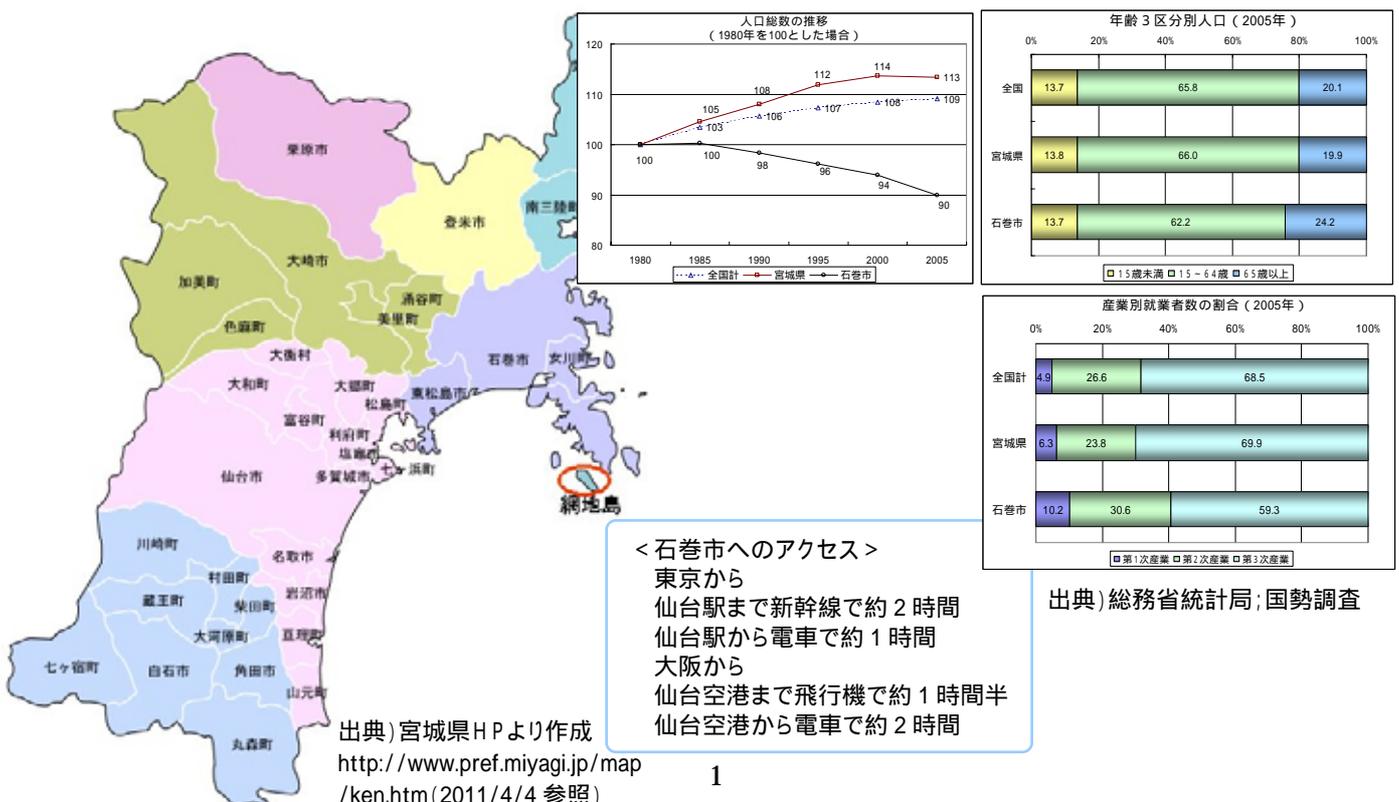
## 高齢化が進み、人口減少傾向にある網地島

網地島は、石巻市の牡鹿総合支所の管轄になり、牡鹿半島の先端近くの南の沖(石巻港から約1時間、半島先端近くの鮎川港から船で20分)にある。牡鹿総合支所管内は、市平均より高齢化率が高く、そのなかでも網地島の高齢化率はさらに高い(69%)。近海や遠洋の漁業が栄えた時代には3,000人を超える人口があったが、昭和30年代後半からは漁業環境の変化や高校や大学進学等で若者世代が転出するなど人口の下降傾向が止まらず、2000年の国勢調査では555人、2005年には493人となった。

島は2つの集落で構成され、島の北側が網地浜地区、南側が長渡浜地区である。島の中央部に小学校、中学校があったが、最後の中学生の卒業を以て、2000年3月に休廃校となり、それ以後は、子どもがほとんど住んでいない状態となっている。

## 温暖で過ごしやすい島の気候

網地島は、年間の平均気温は12.2。温暖で降雨量も少なく、島の至る所に常緑樹や棕櫚が自生し、まるで南方の島のようにもいわれている。



海水浴場として人気の網地白浜があり、その海の水は、透明度が高く、避暑地として人気がある。ただし、それは、夏の観光シーズンだけで、それ以外は、人が訪れることもない静かな島である。

隣には、網地島の動きに感化されて、地域づくりが活発に行われている猫の島<sup>たしる</sup>田代島がある。

## 取り組みに至る経緯

### 始めは罵声から、そして、根気強く話し合い

宮城県では離島活性化支援事業を実施していた。県から職員を現場へ直接派遣し、地元住民と一緒に地域活性化について考え、それを具体化する事業である。2003年、宮城県企画部地域振興課の佐藤浩也<sup>さとうこうや</sup>氏が、地元住民及び牡鹿町<sup>あしかちよう</sup>（当時）との事前調整もない中、網地島の担当となった。

2003年7月、初めて島民と県との話し合いがあった。島からは、各行政区長や婦人会会長、民生委員、網地島漁業組合長、町議、そのほか島民の方々、数名が出席した。しかし、日頃から離島は何かしら不便を強いられ、置き去りに

されているという気持ちがあり、行政に対して強い不信感を募らせていた島民達は、県職員に罵声を浴びせるなど、かなり厳しい対応をしたという。

ましてや、この離島活性化支援事業は、事業費としての予算がなく、県職員の島までの往復の旅費とコーディネータの報償費があるばかりと分かると、「予算もないのに、いったい何をやる気か?」、「そんなことより島の振興につながる施設整備をして欲しい。」と声を荒げる人もいた。

佐藤氏は、根気強く、大規模な施設整備によらない「地域づくり」で、島の活性化を目指すということを説明し、島民側は、とにかく継続的に話をするというので受け入れることとした。

### 出来ない、は体験することで出来ることへ

「年寄りは何も出来ない」という考えを変えてもらうため、佐藤氏は、実際に高齢者が地域



廃校となった島の網長中学校が活動の拠点。10年前に廃校になったにもかかわらず、校舎からは今も子ども達の声が聴こえてきそうだ。



早速海に行ってサイクルボートに挑戦。この遊具は、地元の関係者より寄付された。



漁師歴60年を超える大ベテランの奥田さんに、船外機の使い方を教えてもらう。

づくりへ積極的に参加している姿をみてもらおうと、2003年10月に、宮城県柴田町<sup>しばたまち</sup>から福祉劇団鶴亀<sup>1</sup>を招いた。このとき、島の踊りの保存会などのグループと一緒に「島の楽校の楽芸会」を企画することになった。この会は、全島民の半分である約250人が集まるほどの大盛況となった。

後にあじ島冒険楽校の事務局長になった阿部<sup>あべ</sup>欽一郎<sup>きんいちろう</sup>氏は「あのときの盛り上がりは、島民の心に『何かしてみたい』という気持ちを生んだ」という。

さらに、佐藤氏がNPOの協力を得ながら、「地域づくり」の研修会や地域資源を再発見する活動を次々に行うと、島民は積極的に参加した。島外のNPOから『島の地域資源はすごい!』と評価され、いつの間にか、島民の中に、島に対する誇りと「何かできるかも」という自信が生まれていった。そして、有志を中心に何が出来るかを話し合い、ほとんど子どもが住んでいないこの島に、島外から子ども達を招き、都会では経験できない自然に触れる体験をしてみよう、そして、将来、縁があれば島にまた来てもらいたい、という思いをもつようになり、「あじ島冒険楽校」の実施に向けて動き出すこととなった。

## そして、あじ島冒険楽校を全島あげて応援することを島民集会で決議

こうしてあじ島冒険楽校の案が出てきたわけだが、事業の実施になるとそう簡単にいかない。島には2つの集落があって、網地浜地区は人口が150人程度、一方の長渡浜地区は340人程度。以前は小中学校を共有しており、連携する機会もいろいろあったが、今は学校もなくなって、相互がつながる機会が減っている。人口が少なく、高齢化率が約7割という島であれば、何をするにも協力関係にあることが重要である。また、住民の中には、島には子孫に残して守らなければならないものがあるわけでもない、高齢者が今更何をするであろうかという考えを持つ人もいた。

何か事業をするにしても、有志が勝手にするのはなく、島として、この活動に取り組むという位置付けを明確にすることが、住民主体で島を盛り上げていくために何より大事なことであった。

2004年5月下旬、網地島コミュニティー推進協議会<sup>2</sup>総会は、「あじ島冒険楽校」を全島あげて支援することを決議した。この結果を得られたのも、島民間の話し合いを何度も重ねたこと、「島の楽校の楽芸会」等の実践が成功したこと、住民主体で地域課題解決に取り組んでいるNPOとの交流で何かやらねばという思いを持つようになる人や島の魅力を再発見し、島に対する誇りと自信を持つ人が増えたことなどによるものである。これにより、2つの集落をまたいで、この事業に取り組むことがしやすくなり、多くのボランティアの参加を得ることにつながっている。

<sup>1</sup> 高齢者が福祉の難解な言葉で戸惑っているため、「誰でも目で見て理解できる」演劇という手法でわかりやすく伝える劇団を一般町民が1991年に創設。劇団員の平均年齢は70歳を超えている。2002年地域づくり総務大臣表彰受賞。

<sup>2</sup> 網地島コミュニティー推進協議会とは、長渡浜地区と網地浜地区をつなぐ全島にかかる協議組織

**Point** 活動を支援したNPO

- ・団体名: NPO 法人<sup>ふぼう</sup>不忘アザレア  
宮城県白石市にある民間スキー場が経営不振で破綻した際、その存続のために地域住民が結成したNPO法人。現在、市からの委託による経営を実施。(支援内容)地域活性化に住民がどのように関わるか、などを知るための研修会を支援。
- ・団体名: 日本野鳥の会(宮城支部)  
(支援内容)島に渡ってくる野鳥を島民と一緒に調べ、77種類の野鳥を確認した。この報告は、プログラムを考える上で大変貴重な情報になった。
- ・団体名: NPO 法人宮城県森林インストラクター協会  
(支援内容)組織運営の方法、子ども達との接し方、流木や貝殻を使ったクラフトアートの手法等を網地島へ会員を派遣して直接指導。冒険楽校で行われるTシャツへのロゴ(あじ島冒険楽校、太陽のマーク等)のプリントは、子ども達に大人気。同じロゴのTシャツを着ることにより、仲間意識も醸成されている。

**Point** あじ島冒険楽校の自然体験プログラム

- ・「ながぐづ先生の網地島植物教室」  
「ながぐづ先生」こと、高橋和吉先生(大崎市在住。約40年前に網長中学校で教鞭を執る)の指導で島の自然について学び、植物を使った遊びなどを体験する。
- ・島伝統の魚釣り「あなご抜き」  
手作り竹竿で魚を釣り、自分が釣った魚を浜で焼いて、昼食に食べる。
- ・流木や貝殻を使ったクラフトアート教室  
宮城県の森林インストラクターの阿部雄<sup>あべたけし</sup>さんが指導。
- ・シーカヤック体験
- ・竹鉄砲や竹とんぼ作り・・・など



あじ島冒険楽校 事務局長  
阿部欽一郎<sup>あべきんいちろう</sup> 氏



あじ島冒険楽校の事務局長であり、当時は牡鹿町議会議員(現市議会議員)。活動の初めから関わり、自分も一役果たそうという思いを持ち、活動の中核となっている。

**「自分たちでできることは自分たちでやらないといけない」**

Q. 県からの話を聞いてどう思われましたか？

それまでは直接、県と関わることがなかったのですが、これをきっかけに島でなにができるのか、話し合いを進めていくことになりました。県からの話が来た当時、石巻市との合併の話が持ち上がっていて、石巻市と合併してしまうと、周辺地域ましてや離島などは置き去りにされてしまうのではないかとという危機感がありました。私は町議会で活動していたのですが、島もすべてが行政に「おんぶに抱っこ」状態で、これではだめだと思っていました。自分たちでできることは、自分たちでやらないといけないと考えていたので、県の事業と自分たちがやろうとしていたことが一致したと思います。

Q. なぜ冒険楽校というアイデアになったのでしょうか？

小学校が閉校してから島に子どもたちがいなくなってしまったので、なんとか子どもたちを呼びたいという思いが強かったのです。地域の振興となれば、すぐに経済の活性化とかがあがるのですが、島の活性化といえば異世代の交流が、まず重要だと思いました。合併しても、そのような活動を通じて網地島をアピールするのがよいのではないかと考えて、取り組みを始めました。

## 現在の取り組み

### あじ島冒険楽校スタート！

2004年7月下旬から8月下旬にかけて、「あじ島冒険楽校」を3回開催すると、約100人の子ども達等が参加した。テーマは、「昔の子どもたち」から「未来の大人たち」へ「島の夏休み」を伝えること。このコンセプトも佐藤氏のアイデア。「昔の子どもたち」(島のおじいちゃん、おばあちゃんたち)が先生となり、「未来の大人たち」(島外から来た子どもたち)と一緒に島の自然や生活文化を楽しむというものである。現在は、8年目を迎え、これまでに延べ700人の子どもたち等が参加している。

### 本当に盛り沢山の自然体験！楽しくて、また来たい！

あじ島冒険楽校では、多くの自然体験プログラムが用意されている。子ども達は、自分の好きなプログラムを選んで体験することができる。

募集は報道発表と石巻市のホームページで行

っており、学校などは通していない。毎年、定員を超える応募があり、多いときは抽選にするほど。参加者は石巻市内と市外で半々になるが、福島県、岩手県、栃木県、東京都など県外から来る子どももいる。活動初期は子どもだけの参加としていたが、最近は、親子参加を受け付けていて、親子での島のファンが増えている。

### あじ島冒険楽校を応援している人々

こうした活動を当初から中核となって実施しているのが、網地浜行政区長<sup>おけやあつし</sup>の桶谷敦氏である。桶谷氏はとても人望の厚い人で、面倒見が良く、人との交流が大好きな人でもある。また高齢化の進む島の将来を懸念し、様々な活性化策に取り組んでいる。桶谷氏は元々島の出身であるが、しばらく島を離れていて、戻ってきた人でもあり、客観的に島の良いところ、改善すべきところをつかんでいる。持ち前の人好きのよい性格と地元<sup>おけやあつし</sup>の海産物(とお酒!)で人をもてなし、徹底的に話をし、人を引き込む魅力を持っている。

もう一人のキーマンが島の元民生委員である



これから竹とんぼの作り方を教えてもらいます。



名人から島独特の釣り方であるあなご抜きを伝授

学生ボランティアも魚をさばく



楽校の調理場で夕食の用意。沢山の住民の協力と子ども達のお手伝い。料理は、天然のうに、あわび、そして、クジラの味噌汁「トイ汁」、クジラの生姜焼きと海の幸が満載!!ウニが珍しいのか、じっと見る子どもも。

奥田長雄<sup>おくたながお</sup>氏である。まじめで長老格のその存在が、多くの島民に働きかける際の後盾となっている。子ども達が海の体験をする際には、長時間、船に乗って、子ども達を見守ってくれている。

伝統の魚釣りでは、吉田長吉<sup>よしだ ちようきち</sup>氏や奥田和慶<sup>おくた かずよし</sup>氏が、事前準備と子ども達の指導を行っている。

食事は、長渡婦人会（現役の海女達）が、子ども達に自慢の料理を教えながら調理している。

また、宮城教育大学や宮城学院女子大学からは、先輩達からの引き継ぎがあり、毎年5人くらいの学生ボランティアが参加して、子ども達が楽しく安全に過ごせるように配慮してくれている。そして、卒業後も、島へ遊びに来たり、仙台市内で開催される同窓会へ参加したりと、島民との交流が長く続いている人が多い。中には結婚して、子どもが生まれた人もおり、島民は、親子でのあじ島冒険楽校への参加を心待ちにしている。

このように多くの方々の温かな協力を得て、冒険楽校は成り立っているのである。

さらに、竹鉄砲や竹とんぼづくりの先生であり、島の楽校の管理人をしている阿部富昭<sup>あべとみあき</sup>氏など、力強い助っ人が何人もいる。阿部氏は「桶谷区長の思いに、やっと、この島でやる気がある人が出てきた」と感動したそうだ。

### 活動の実施は地域で、煩雑な事務処理等は行政が受け持つ役割分担

網地島は高齢者ばかりなので、パソコンを使った参加者の募集・受付といった煩雑な事務処理は苦手である。そこで、募集・受付は、石巻市牡鹿総合支所が受け持っている。地域づくりは、何でも民間がしなければならないというものではない。行政と協働していくことが大切である。牡鹿総合支所では引き継ぎをしっかりと行い、島の活動を支えている。そして、職員は担当から外れても、休日にボランティアで参加してくれている。網地島にとって、心強い存在となっているのである。



あじ島冒険楽校 副楽校長  
桶谷敦<sup>おけやあつし</sup> 氏



外国航路の船乗りだった経験があり、見識が広く、力強いリーダーシップを持つ行動派。

### 「この島をふるさとだと思って欲しい」

Q. はじめに冒険楽校のアイデアを聞いたとき、どう思われましたか？  
私は何かしなければならないと思っていたし、なんだってやるつもりだったので、すんなりと話を聞けました。行政区長になって間もない頃でした。年寄りをなんとかしないといけないと思っていたし、子ども達が慰問に来てくれると、涙を流して、お年寄りが喜んでいたので、ポイントは子どもだと思っていました。

Q. 桶谷さんはこの事業によって、どのような成果を期待していますか？  
地区のコミュニティでお寺や神社の代表や民生委員など役があるが、人数が少なくなると、やる人が減っていく。極端になると、1人で全部やらなければならなくなる。団塊の世代が、島に住みたいとやって来るかもしれないという話を聞いたことがあるが、実際はなかなかそうした人は来ない。定住する人が増えないので、交流人口を増やして、常時入ってくる人がいれば、賑やかでいいのではないかというのが私の考えなのです。ただ人が来るだけの観光は好きではない。心温まる交流が必要なのです。子どもの頃に行ったからといって思い出して、将来住んでくれれば、なお良いが……。そして、自分のふるさとのように網地島のことを思い出してもらいたい。

## 取り組みのポイント

### 小さな成功体験の積み重ねが島民主体の地域づくりを育む

地域振興として働きかけることは多くの自治体で実施されているが、地域側は、地域住民や組織が主体となって取り組むという方向性は、共有しても、実際にできるのか、誰が中心となるのか、何をするのか、どうやってするのか、といったことになると、事業は、方向性が見えないまま止まってしまうことがある。

この事例では、実際に住民主体で地域課題解決に取り組んでいる NPO と交流し、自分達の手で島を盛り立てていく必要性の認識や島の魅力の再発見の機会などが、県職員である佐藤氏が関わっている 1 年間の中で企画・提供された。そして、住民は意識啓発の段階から具体的な行動まで段々とイメージを作ることが出来た。また、「島の楽校の楽芸会」やモニターツアー等の小さな成功体験を積み重ねたことによって、自信を持ち、島民による主体的な運営につながっていったのではないだろうか。

### 島の誇りを島外の目で発見 (島外からの評価を伝える)

活動の立ち上げに要した期間は 1 年ぐらいであったが、その間の島の魅力再発見活動を通じて、島では当たり前であった釣りの手法である「アナゴ抜き」やうにやあわびの豊かな海の幸、野鳥の宝庫（渡り鳥の中継地）、タブノキや棕櫚等の特異な植物相など、島外の人からみると島がとても魅力的な資源を有していることが再認識できた。このことで、島民が島や島の生活文化に対する誇りを取り戻し、積極的に島外の人達へ我が島をアピールする行動につながっていったのである。

### 島全体の活動としての位置付け

島全体の自治協議組織である網地島コミュニティ推進協議会で、この活動を支援すると位置付けたことの意義は大きい。複数の有志だけによる取り組みでは、ボランティアの確保や島の楽校の利用、行政からの応援などを得ることが難しい場合もある。この事例では、島全体として正式に取り組むということが位置付けられているため、さまざまな調整や各種団体との連携が円滑に進んでいる。また、島民の総意は、発展を支える基盤としての役割も果たし、これからの地域づくりのエンジンとしての機能が期待できる。



元網地島民生委員

おくたながお  
奥田長雄 氏



地元の長老格で、島民からの信頼が厚い。この活動を推進する上で、この人の一言が他の島民を動かす動力源である。

### 「やることと誰がするのが分かることが、一步踏み出すのには重要」

Q. 冒険楽校のアイデアを聞いたとき、どう思われましたか？

自分が一番反対しました。そういうこと、全然考えてもいなかった話ですよ。子どもたちを連れてきて、ここでそういう遊びをさせるといっても、結局、我々が現場に行かなければならないし、一人や二人でできるものでもない。どう皆が協力できるかと思った。皆の意見も聞かなければならないし、とりあえず、冒険楽校などだめだと反対しました。

Q. 気持ちが変わったのはどうしてですか？

いろいろ話を聞いているうちに、それくらいなら何とかかなりそうだなという気持ちになりました。まあ、正直大変だと思う気持ちはあったが、(民生委員として以前) 桶谷さんに行政区長をお願いしたいと頼んだ経緯があるので、桶谷さんにやってくれと言われたら断れなくて。この区長さんがなんでも積極的にやってくれるものだから、周りもみんな気がつけば協力しています。

## 取り組みの成果

### 島の住民のやりがいと島の一体感の醸成

この活動には、多くの高齢者が参加している。久々に聞く子どもの声、楽しそうに遊ぶ姿を見て高齢者もまた喜んでいるようだ。島民たちは釣りや料理の先生なので、一生懸命、子どもたちに教えることに喜びを感じるという声や島の暮らしに誇りを取り戻したという声が聞こえている。島民のやりがいにつながり、また、島の規模に見合った経済的な成果もあげているといえよう。住民が一つの事業を目標に準備を進めることで、地域コミュニティの一体感を醸成することができた。

### 冒険楽校の成功が新たな地域づくりを育む

網地浜地区は、人口が少なく、高齢化の傾向が顕著になっている。地域の環境整備ができる人手が少なくなり、地域の環境は荒れ始めていた。

網地浜地区では、あじ島冒険楽校の成功に自信を深めた桶谷敦氏が、島外の人にも呼びかけて「あじ朗志組」を結成し、海水浴場の清掃活動、人がいなくなって通れなくなった道の手入れ、漁業資源を守るための植林などに取り組んでいる。最初は島の有志5人で始まった活動であるが、島外のボランティアも加えて、現在は47名で活動を続けている。桶谷氏の熱い思いが伝わってネットワークも広がり、最近では、浜辺でのプロレスやピアノコンサートなどの企画も実施している。

また、虐待や家庭の事情から親と一緒に暮らせず、悲しい思いをしている子ども達の「心のふるさと」になってあげたいという思いから、児童養護施設の子供達を招待する「網地島ふるさと楽校」が、あじ朗志組の主催で毎年実施されている。

## 今後の展望

### 四季を通して「あじ島冒険楽校」を開校できる体制づくり

島の宿泊施設の収容力の限界もあるが、高齢者が主体のボランティアで実施しているため、スタッフが疲れてしまわない程度の回数でしか実施できないのが現状である。参加する子どもの数は自ずと制限されることもあり、なかなか希望者全員を受け入れることが出来ない。今は、夏にのみ開校しているが、今後は、野鳥や植物の観察、浜トレッキング、シーカヤックなどを取り入れて、春・秋・冬にも人を呼び、さらに、子ども達以外の交流人口も増やしたいと考えており、そのための人手も含めた体制づくりが課題となっている。

### 島全体の産業の活性化へ

実は、網地島周辺の海域では、数年前より海藻が急激に減少し、海が砂漠化する磯焼け現象が発生している。アワビの大きさも小ぶりになってきているなど、海藻を餌とする生物の減少が生態系全体に波及し、漁獲量が激減する状況が発生している。行政の予算などには限界があり、効果的な手だてがなかなか打てない中で、「あじ朗志組」が中心となり、漁協の協力も得ながら海藻造林の専門家による講習会や実地研修を受け、自分達でコンブ造林が出来るよう取り組みを始めている。漁業資源豊かであった網地島をもう一度再生したいという思いを持ち、そうした島の活性化に、これから島全体を巻き込んだ取り組みとなることが期待される。